

◎中国地方短歌大会講演

歌をよむ面白さ



永田和宏

(ながた かずひろ)

平成十年二月十四日(土)、岡山県総合福祉会館で行われた。中国地方短歌大会において、選評に先立ち、永田和宏先生の「歌をよむ面白さ」と題するお話をうかがいました。歌を「詠み」あるいは「読む」ことの奥深さにふれることができたのでした。

☆リアリティーとは

今日は「歌をよむ面白さ」ということで話をさせていただきたいと思っております。「よむ」というのは、ひらがなで書いてありますが、歌は自分で作る場合には詠むと言いますし、人の作品を読む場合には読むと言います。漢字は違うわけですが、どちらもよむと言います。今日は自分で作る面白さでもあるし、人の作品を読む面白さについての話にもなると思います。

・ きみが遺体の掘り起こされしそのみが瓦礫の中にくぼみていたり

これは、阪神大震災のときの歌であります。一読してよくわかる歌であって、しかもこの歌から喚起されてくるイメージ、そのときの状況というのがくつきりとわかる歌です。短歌というのは、ご存じのように機会詩という側面を持っておりまして、何か出来事が起こったとき、社会的な大きなニュースがあったとき、あるいは自分の身近なところで、誰かが病気になるたり亡く

なったりしたとき、そういう出来事に取材をして歌にすることができると。そういう特別な詩型でもあります。阪神大震災が起こったときには、直接に被害に遭われた方も、あるいはそれをテレビや新聞でご覧になった方も、たくさんのお歌を作られました。私が挙げました作品には非常に強いリアリティーがあります。

最初にリアリティーというのはどういうものかということを考えてみたいと思います。この作品で、まず注目されるのは、結句の「くぼみていたり」というところで、何日かして遺体が掘り起こされた。遺体のところだけがやくぼんでいる。ここに注目をしたわけですが、遺体が長い間、そこにじっとして放置されていたということまで一瞬にして読者にわからせてしまう。こういうものが歌におけるリアリティーというものの本質ではないだろうか。考えるわけです。リアリティーというのは、こういう作者の目があるかどうかで生まれてくるものだと考えています。

・ かなしくも四五日分のひげ伸びて怪我ひとつなき遺体掘り出す



同じ阪神大震災のときの歌で、心が痛む歌ですが、この歌の着目点は「四五日分のひげ伸びて」というところでしょうね。うっすらとひげが濃くなっていたんでしょね。あるいはひげを剃っておられなかったのかもわからない。わからないんだけど、遺体を見たときに、四、五日分ひげが伸びていたというところに作者は気がついた。即ちその期間だけその人は誰にも見つけられずに放置されていたということを感じさせてくれるわけです。掘り出されるのを待ちわびながら死んでいかれたのでしょうか。こういう一点に注目するということ

が、リアリティーを感じさせる一番大きなところではないでしょうか。こういうところが見つけれられるというのは、非常に難しいことですね。

特に機会詩として大きな事件を扱うときにはそうです。新聞歌壇の選歌などをしておりますと、短歌というのはいかに足の速い文芸であるかというのを実感します。例えば、湾岸戦争が起こりますと、たちまち湾岸戦争の歌がドツと押し寄せてきますね。オウム事件がありますと、オウム事件の歌ばかりになってしまふ。美空ひばりが死ぬと、美空ひばりの死を悼む歌ばかりになってしまふ。そういうふうな歌というのは、事件に非常に敏感な詩型なんですけども、注意すべきは、みんな同じ歌い方になってしまふことです。オウム事件で何が一番よくうたわれたと思いますか？これはカナリアなんです。毒ガス、サリンなどが残っているかどうかを検査をしにゆくときに、鳥籠にカナリアを連れて行ったのを覚えておられるでしょうか。湾岸戦争のときの歌は油にまみれた海鳥でした。覚えておられる方も多いと思いますが、石油タン

クが破壊されて、海鳥が全身油にまみれて立っている映像がテレビで流されました。確かにこういうカナリアとか油にまみれた海鳥は具体的なもので、しかもその事件を非常に象徴的に表したものだと思いますね。ただ問題は、みんながその歌になっちゃっているということ、それが非常に難しいところですよ。私たちはテレビや映像を通じて事件を知ること、日常茶飯事になっておりますから、そういうことを抜きにしては世の中の動きを知ることではない。だけど一方ではニュースや映像というのは、映した人の視点で切り取られた画面だということですね。これは非常に重要なことです。みんなが与えられたニュースに拠りかかって作ってしまふと、歌が既製品になってしまふ。確かに油にまみれた海鳥というのは衝撃的な映像でしたし、湾岸戦争のひとつの事実を語っているわけですけども、それは作者が見つけた映像ではないというところが難しいところですね。与えられたものから、ちょっと目をそらして、ものを見るという態度が歌を作るときには非常に大事だろうと思います。

佐藤佐太郎さん、もうお亡くなりになりましたが、作風としては、非常に写生というのを厳密に守られた方ですが、一点にこだわることによつてものが見えてくると、このことを言っておられます。とても大事なことで、今日の話のひとつの骨子にしたいと考えております。海鳥でもカナリアでもそうですが、具体物にこだわることによつて見えてくるものがあります。一方ではそういう既製品、新聞の写真やテレビの映像だけによりかかっているのでは具合が悪いということがあります。その何か一点というのを自分でどんなふうにして掴まえてきたらいいかをお話したいと思います。

☆一点集中

佐藤佐太郎の歌を一首挙げます。

・山中の旅の宿にあやしみて砂澱む風呂に吾はつかりぬ

この歌の眼目は、まず「砂澱む風呂」でしようね。旅の途中の少しうらぶれた感じを風呂の底の方に砂が澱んでいたとらえたところで歌が生きてきたんだらうと思います。写生というのはアララギ派の伝統で

ありまして、物事をありのままに写せとあります。でも、ありのままに写すということとは可能なんでしょうか。例えば今ここに水呑みがあります、この水呑みを言葉で写してくださいと言ったら、どんなふうに写しますかね。三十一音という僅かな言葉の中でやるというのは、本当は不可能ですね。私は写生というのはありのままを全部写すことなんかじゃないと思っております。自分が見たものの中の一点、それをつかみ出してくることだと心得ています。あるときの感情を代弁してくれるものを目の前の風景の中からピックアップしていく、それが写生だというふうに思っています。つまり写生というのはありのままを写すということではなくて、どこか自分の見つけた一点に意識を集中させることによつて、自分の気持を表現する、それが本当の意味の写生なんだらうというふうに考えています。

アララギの指導者の一人である島木赤彦の言葉ですが、悲しいといえ甲にも乙にも通じる。しかし、決して甲の特殊な悲しみも乙の特殊な悲しみをも表さない。歌に写生の必要なのは、ここから生じてきます、

というふうに言っています。つまり悲しいという気分を伝えたいときに、悲しいと言ってしまったら、それはもう私の悲しみではなくなる。私の悲しみを伝えるには、その悲しい気分をもつて外界を見たときに掴まえてきたものによつて、悲しい気持を表すしかない、これが写生なんだらうと思えます。悲しいと百回言われるよりも、そのとき掴まえてきたものによつて、悲しい気分が出る、これが歌の味わいになるんだらうと考えます。

岩切久美子さんという方の「空耳」という歌集にこういう歌があります。

・秋深し菊人形の若武者の横笛いずれも唇に届かぬ

菊人形は横笛を吹いているわけですね。

よく見ると、横笛ははるかに唇から離れたところにある。何ともひねくれた見方です。でも私たちがものを見るといふのは何だらうかということをおぼろげに考えさせてくれる歌です。笛を吹いていると思ってみるから吹いているように見えるだけで、実際の笛の位置はとも吹ける距離じゃない。これは歌舞伎でも同じでひとつの型ですよ



ね。ああいう格好をして立ってれば、それは笛を吹いているものだと思うわけです。この歌は、そういう我々が普段見ていると思っているものを、そういう見方とは一体何なんだろうかと考えさせる歌じゃないでしょうか。

吉川宏志さんの『青蟬』という歌集にある歌です。

・茂吉像は眼鏡も青銅こめかみに溶接されて日溜まりのなか

この歌を読んだときは、やられたなと思いましたがね。眼鏡って当然耳にかけるわけですよ。耳以外のところには眼鏡をかけない。ところが茂吉の眼鏡は、よく見ると耳にかからなくて、こめかみのところに溶接されていると発見したわけです。

つまり私たちがものを見るといふのは、全体の文脈の中で見ている、ということ。この歌は端的に教えてくれます。つまり眼鏡をかけているとか笛を吹いているという文脈の中で見ると、それはそれで何の変哲もないんだけど、そういう文脈を離れて、そのもの自体をジッと見ると、非常に変なところに笛はあるし、眼鏡はこめかみに溶接されている。そこに気がつく。我々がいかにか日常文脈の中でしかものを見てないかということ。この歌は教えてくれるんだと思います。

日常生活の文脈の中で見ていると、そのものが本来持っている面白さというのになかなか気がつくことができない。横笛がいずれも唇が届かぬとか、青銅の眼鏡がこめかみに溶接されているということは、何も大きなことを言っているわけではない。

すけれども、普段人が気づかないようなところに気がついて面白がることもできる。

面白がるだけじゃなくて、ものを見るといふのは、何なんだということ考えさせてくれる、そういう意味で歌は認識、発見、というものを可能にしてくれる詩型だと考えられます。これは歌を作っていくときの大きな喜びにもなるのではないかと思っています。そういう認識の面白さということ。言いますと、次の奥村晃作さんは、とても面白い歌を作る方です。

☆発見の詩型

・名にし負ふ霧の摩周湖この白き霧の真下に摩周湖はある

摩周湖というから、非常にロマンチックでもあるし、一度見たいと思うわけです。展望台みたいなのがあるんですが、迎り一面ろすようになってるんですが、迎り一面霧で何も見えない。だけど私たちは、その霧の下に摩周湖があることを知っている。知っているからそこに摩周湖を見たような気になる。そこがこの歌の何ともチグハグで面白いところですね。本来見えない霧の

摩周湖、私も霧だけで何も見えないところを見てきました。この歌の面白いのは、「名にし負ふ」なんて言って、自分には何も見えない摩周湖がそこにあるはずだということが無理に納得させているような、まことに旅行者風な納得のしかたが変に面白い。あと二首ほど奥村さんの歌を紹介しておきます。

・次々に走り過ぎゆく自動車の運転する人みな前を向く

何とも人を食った歌だと思いませんか。前向いているのは当然でしょう。どんな自動車も流れていく。そのときに、ああ、この人もこの人も前向いている、とは普通は思わない。運転するとき前向くのは当然だと思っているから。だけど、あらためて「運転する人みな前を向く」と言われてしまふと、そうか、運転するときは前向くんだというふうにちよつとは思ってしまうせんか。こういうところ、私はゼロ状態です。ゼロの状態。何も先入観のない状態です。そういう状態のものを見るとどういふふうになるのか。先入観を捨ててものを見ると



いふのはとても難しいんですね。我々は日常生活では、本当にいろんな先入観とか常識でものを見ています。常識とか先入観というものをどんなふうにして振り払うかというの、歌を作るときが一番大きな努力じゃないでしょうか。

・信号の赤に対ひて自動車は次々と止まる前から順に

後ろから止まったら大変ですよ。やっぱり信号は、前から順に車が止まっていく

んです。だけど、なんかやっぱ面白いんです。何で面白いのか、当たり前のことがあるまりにも当たり前で言われてしまうと、そんなことさへも気がつかなかった自分というの、どっかで見えてしまうんですね。全くつまらないことです。でも大切なのは、歌の内容の価値じゃないんです。大事なものは、物事をこんなふうにも見られるんだよという可能性を示してくれること、これはたぶん我々がいろんな歌を読むときの、一番の醍醐味だろうと思います。佐藤佐太郎も同じような歌作っています。

・連結をはなれし貨車がやすやすと走りつつ行く線路の上を

変な歌ですよ。線路の上を走らなかつたらどこを走るんだということになります。この歌、それが目立たないように作ってあります。一本の線路の上を、連結を離れて貨車が一両軽々と走っていく。そのときのある寂しさなんじゃないか。とてもいい歌だと思います。

「線路の上を」は蛇足ですよ。だけど、それを言うことによつて、貨車の動いていくところに線路がずつと伸びていくところま

で意識させます。これで生きてきた歌だと思えます。歌というのは大事なことを言う、それは当然なんですけれど、大事でないことを言うのも歌なんです。大事でないことを言うことによって、そのときの作者の心情というものが浮き出てくることがあります。そういう意味で、この結句はとてもうまい作品だろうと思います。

次は小池光氏の『日々の思い出』という歌集の中にある歌です。

・父十三回忌の膳に箸もちてわれはくふ
蓮根及び蓮根の穴を

この歌、何がいいかと言ったら、新しい発見だろうと思いますね。大袈裟に言うところ、蓮根の穴を食わずに蓮根を食べるかという問題。我々は蓮根を食うとき、蓮根の穴も食っているんだと小池光は気がついた。科学的発見であるというわけにはいきませんが、ただ面白い歌です。蓮根の穴に注目したときの作者小池光の心のありようがとても面白いですね。お父さんは直木賞の受賞作家でもありました。ところが突然道で倒れられて亡くなってしまったんですね。志半ばだったんでしょ。

小池光は、お父さんの無念を一番わかっている。途中で亡くなって心残りであろうし、志半ばであった無念を思いながら、村人たちの中で十三回忌の膳を囲んでいる。うまく話題に加われなかったのかもしれないね。フツと気がつく蓮根の穴も食っている。お父さんに対する思いと、今自分が蓮根の穴を食っていることと、この二つが一首の中で妙にアンバランスでありながら、どこかリアルティが強くて、忘れがたい歌になっていると思います。人の歌集からそういう感性を学ぶことで自分が作る歌の幅も広がってくるんだと思いますね。高野公彦氏の歌を挙げます。

・黒き月を三日月抱けり起伏なき日々か
さね人はこころ病みゆく

ちょっとわかりにくい歌ですが、三日月の内側にもう一つ丸い月があるというのに気がつかれたことはないでしょうか。私たちは普通光っている方だけを見ます。だけどその三日月の内側にもう一つ丸い月がある。それは黒い月であると高野さんは感じましたね。そういう見方、感じ方、とても大切であろうと思います。ひねくれて

いると言えはひねくれてるわけですね。陽の方を見ないで陰の方を見ているわけですから。けどそのような見方をしながら下句の方で「起伏なき日々かさね人はこころ病みゆく」と言っている。何が言いたいんでしょうね。本当のところはよくわかりませんが、病むというのは文字通り病気になるという意味ではなくて、平平凡々たる日々を重ねて感性が鈍化していくということを高野さんは言いたかったのかもしれない。

こういうものの見方をできる人というのは、非常にすごいというふうに思います。常識的には三日月が出てくるだけで、決して黒い月は出てこない。黒い月が見えるということが非常に大事なことだと思います。

歌は発見の詩型であり、認識の詩型でもあるし、人の歌を読むということは、新しい感性の型を学ぶという意味でも大切なことではないでしょうかというふうに思っています。ということで今日の話は終わらせていただきます。どうもありがとうございました。